

第2章

事前活動

第61回日米学生会議報告会	
および講演会……	14
立命館大学講演会	
第62回日米学生会議関西説明会…	14
第62回日米学生会議選考会……	14
春合宿……	15
英語ディベートワークショップ……	18
防衛大学校研修……	18
学生有志活動 沖縄研修……	19
直前合宿……	22

第62回日米学生会議事前活動

第62回日米学生会議の事前活動は2009年12月の第61回日米学生会議報告会から始まった。新たな参加者が決まる前は、日米学生会議の存在と意義を社会に伝えることを目的として各種のイベントを開催する。参加者決定後は講演会、レクチャー、コミュニケーション講座、英語ディスカッションなど多岐にわたるプログラムを行い、本会議を充実させる準備を行う。また本年は、日米学生会議参加者有志による沖縄研修も行われた。本章では、これらの事前活動と有志の活動の様子を紹介する。

第62回日米学生会議活動の様子		
1	12月19日	第61回日米学生会議報告会、第62回日米学生会議説明会
2	12月22日	立命館大学講演会、第62回日米学生会議関西説明会
3	3月	第62回日米学生会議 京都選考会・東京選考会
4	5月3日～5日	春合宿
5	5月22日	英語ディベートワークショップ(井上敏之氏)
6	6月11日	防衛大学校研修
7	6月25日～28日	沖縄研修(学生有志活動)
8	7月24日・25日	第62回日米学生会議 直前合宿

1. 第61回報告会、第62回説明会

日時：12月19日（土）14：00～18：00

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

概要：前年度第61回日米学生会議説明会に先立ち、本プログラムのアラムナイである猪口邦子氏（現参議院議員）に、「核のない世界へ—今問われる日米の役割とは—」と題して基調講演を頂いた。その後、第61回日米学生会議参加者により各開催地、分科会についてプレゼンテーションが行われた。その後、本年度プログラム参加希望学生向けに、同参加者によるパネルディスカッションを行い、日米学生会議の魅力を広く一般にアピールした。

2. 立命館大学講演会、説明会

日時：12月22日（火）15：00～18：30

場所：立命館大学 創思館1F 小ホール

概要：京都大学教授である中西寛教授に、「核廃絶へ向けて～新しい日米からの考察と発信～」と題して基調講演を頂いた。その後、第61回日米学生会議参加者及び、来場した各大学からの学生との間で、核廃絶は可能か不可能か、国際政治の観点のみならず軍事技術などの多角的な視点からパネルディスカッションを行った。

3. 第62回日米学生会議選考会

場所：同志社大学（今出川キャンパス）、日米会話学院

概要：1月15日よりWebページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果2次面接に進んだ学生に対し、グループディスカッション、個人面接、教養試験を課した。

4. 第62回日米学生会議 春合宿

日時：平成22年5月3日～5日

場所：代々木オリンピックセンター

概要：本春合宿にて4月の選考委員会により最終決定した28名参加者とECが初の顔合わせを行った。本合宿において参加者はJASCの歴史を学び、外国人学生との討論、分科会活動などの「JASCの基礎」を学び、8月の本会議に向けての最初の一步を踏み出す機会となった。

【分科会活動】

第4章各分科会の活動の、春合宿での活動を参照。

【ようこそ先輩】

概要：75年の歴史を築き上げてきた先輩方を囲みでのJASCの歴史を知るための交流会を開催した。第8回参加者の大先輩から直近の第61回参加者まで、あらゆる世代のJASCアラムナイとの対話を通して、本年度参加者たちの8月の本会議に向けたモチベーションアップを図った。

参加者の感想（竹内 智洋）

ようこそ先輩ではJASCに参加して初めてアラムナイの方々と話すことが出来た。先輩方が海外に行くこと自体ほとんど例の無い中、大変な苦勞をしてアメリカへ渡られた事や、アメリカ兵士を中心としたアメデリを前にどの様な思いで会議に臨んだのかなどを聞くことが出来た。これらの体験談を聞きながらJASCerとなれた重みを実感すると共に、参加者として自分が期待される責任について考えた。もともとJASCが歴史のある会議だということは知っていたもののこの企画までは単に第62回参加者という意識しかなかった。しかし、先輩方の話の中から感じたのは自らの会議における成功だけではなくJASCという会議をいかにして次につなげるかの重要性であった。確かに62回を成功させることは大切であるが、その中でも自分なりに次世代へとつなげる事が出来るように努力したいと感じた。

【English Communication Workshop】

講師：井上敏之先生

概要：JASCアラムナイである井上先生をお招きし、春合宿における初の英語を使ったプログラムを行った。本プログラムでは限られた時間の中で、与えられたテーマについて自らの考えを話す練習を中心に行い、「英語で考え、英語で言葉にする」練習を行った。

参加者の感想（奥谷 聡子）

本プログラムでは、本会議に備えて英語で自分の意見を明確、且つ論理的に伝える方法を井上先生に教えていただいた。Point, Reason, Example, Pointの4本柱を意識しながら、最初は二人組になり、「日米学生会議に応募したきっかけ」など身近なトピックから自分の意見をいい、相手が質問し、コメントする繰り返しを全て英語で練習した。限られた時間の中で、ポイントを明確に伝えるのは難しかったが、色々な人とローテーションで意見を言い、更にアドバイスももらったので良かった。最後には3列に分かれ、一人ずつ全員の前で1分間のスピーチをして、フィードバックをしあった。非常に個性豊かなスピーチに盛り上がり、一体感を感じたり、楽しみながら参加できた。論理的に意見を述べることはもちろん大事だが、この練習で学んだもう一つ大切なことはPassionをもって相手を説得できるような話し方の工夫もできることが大切だと感じた。

【English Discussion Session

with International Students】

概要：本会議中の討論は基本的に英語で行われる。各分科会は春合宿中、本プログラムまでに分科会討論を重ねてきたが、それを改めて英語という他言語にて討論し直すことで、英語討論の難しさを生に体感するためのプログラムとしてセッティングした。

参加者の感想（新井 良子）

外国の学生を招き、まず各分科会トピックにつ

第2章 事前活動

いて英語で議論をした。日本語で議論を展開することすら十分難しいのに、それを英語でとなると内容は困難を極めた。しかし、外国の学生の地域に対する意見を聞いただけでなく、RT 一丸となって英語で考え・共有するという本番に向けた実践的な練習をすることができ、有意義な時間となった。また、後半ではスペシャルトピックと題して学生が討論したいトピックを自由に決めて議論を行った。なかでも「平和」について話し合う RT では、参加者の自論がはっきりと見えてきて、大変興味深かった。ディスカッションの面白さはみんなで議論を展開させていくこと自体ももちろんであるが、価値観の違いがはっきりと浮き彫りになったときにその議論が一層深まっていくのではないかと感じた。

【春合宿を終えて、本会議への意気込み】

【竹内 智洋】

合宿では会議に参加する責任と共に尊敬できる仲間を 35 名も得る事が出来た。私はこの多彩なメンバーの中で今後どの様な局面でも自分なりに貢献する方法を見つけ、その中で今後の日本を支える手がかりを模索したい。

【庭野 啓太】

分科会や勉強会で貫きたい姿勢：考えて、仲間と共有し、また考えて、動く。

会議全体で貫きたい姿勢：自分を知ってもらおうとすること。相手を知ろうとすること。対立を恐れずに、相手とぶつかり、とことん話すこと。

【松下 マエス】

どの分科会もあると思うが、しかし NID は特に個と個の衝突が激しい。でも、ここには本気の私をぶつけても、笑って受け入れてくれるメンバーがいるのだと実感。本会議でも本気で衝突するので、みんなよろしく願います。

【飯倉 江里衣】

RT メンバーとすっかり打ち解け、本会議のイメージも膨らみ始め、春合宿を通して様々な不安が取り除かれた気がしました。これから RT の具体的な活動にどんどん取り組んでいきたいと思

います！

【栗原 隆太郎】

JASC は、自分から働きかければ働きかけるほど得るものが大きい場所だという事を実感できた。能動的に動くと同時に、自分には何が出来、何が足りないのかという事を考えながら日々成長して行こうと思う。

【齋藤 友理絵】

同世代の、これほど多くの種類の人々に出会ったことは初めての体験であった。安全保障観も含め、自分の中の何かが変わっていく、そんな漠然とした、しかし大きな予感がする。絶対にこの夏を楽しんでみせる！

【柴田 真也子】

春合宿では予想しないような諸要素に気を配らねばならないことを学びました。それを活かし、どこまで自分たちで突き進んでいけるのか、自分を試す意味でもみんなと一緒にたくさんのチャレンジをしていきたいと思います。

【森田 真弓】

JASCer と話す中で自分の知識の浅さを思い知りました。本会議までには知識を補填し、英語力も向上させてより良い議論が出来るようにしたいと思います。JASC に参加できて、いいメンバーに出会えて本当に幸せです！

【山下 真貴子】

春合宿は本当に楽しく、刺激的で、あれほど濃密で疲れ切った 3 日間はない。一人一人が独特で、強烈に刺激された。私ももっと頑張らなきゃいけないと思った。そして、尊敬できる友人に恵まれた幸運に心から感謝したい。

【片山 直毅】

“Time is limited” 春合宿を終えての率直な感想。時間が限られていても、日米学生会議を “unlimited” な可能性を持つものにしていきたい。

【中澤 耕己】

今年の JASC は（も？）本当に個性の強い人間の集まりである。アメリカに行つて議論するだけでも特別なのに、加えてこの強烈なジャパデリもいる。その中で自分らしさを見つけて、一番輝け

るように頑張れば、多くのことを吸収できると思っている。

【尾崎 裕哉】

全員の思い出に残る、とても素晴らしい企画が沢山組み込まれていた事から、実行委員の丁寧さ、そしてJASCへの熱意が伝わってきました。70人全員の成功を考慮し、私もあらゆる面でJASCの発展に貢献する決意をしました。

【高橋 亜矢】

春合宿で初めて会ったJASCerたちは、皆それぞれ気さくで、興味深くて、輝いていて、参加する前の不安が吹き飛ばされました。今後、夏に向けて、会議が素晴らしいものにできるように、みんなと一緒に、私も最大限頑張っていこうと思いました。

【木本 篤茂】

JASCに参加する上で、援助を出してくれる団体、JASCの基盤を築いてくれたOB・OGの恩に報い、選考に通らなかった人の分まで努力することの責任を果たすべく、最高の夏にします。

【山田 晃永】

才能も行動力もある参加者ばかりで圧倒されかけたが、卑屈にならずに自分なりの役立ち方を模索しようと思った。また、勉強不足だと議論が不毛になりかねないと分かったので、本会議にはしっかり準備して挑みたい。

【細井 駿】

短期間でこれだけ大勢の学生と近い関係になれたのはJASCがはじめてでした。合宿参加まではJASCの輪にうまく溶け込めるかどうか不安でしたがこのメンバーとなら仲良く、そして一生の思い出を作り上げることができると思います。今後の各分科会での事前勉強会やフィールドトリップを通して万全の状態での夏の本会議に参加しようと思います。

【丸山 綾子】

春合宿で熱い仲間と熱い議論に出会い、一気にJASC大好き人間に。時間的・精神的余裕が比較のある4年生という立場から、デリー一人一人の思いを出来るだけ把握して、全員が充実した経験を

出来るように支えていきたいです。

【新井 良子】

自分の未熟さについて痛感した3日間となり、世の中には学ばねばならないことが何とたくさんあるのだらうと愕然とした。しかし、最高の仲間と最高の夏を作り上げるべく、JASCに全身全霊で取り組む覚悟が、決まった。

【有川 慧】

たった2泊3日なのに、個性的でパッション溢れるメンバーと濃密な時間を過ごすことができました。ますますモチベーションもUP！最高の学生会議になるよう、精一杯自分のできることを実行していきたいです。

【斉田 英恵】

この3日間で、確実に自分の中で何かが芽生え始めた。それほど春合宿は新鮮で濃く、刺激的だった。本会議では70の考え方を吸収し、その芽がどこまで成長するのか楽しみつつ、更なるステップアップを目指したい。

【生板 純一】

日米学生会議では人と人との対話を大切にしたい。自分の思いを遠慮せずしっかり伝え、また相手の意見も真摯に聞いて、そこから固定観念や先入観にとらわれない、若者らしい新鮮な発想をしていきたいと思う。

【大井 芳季】

こんなにモチベーションが高い奴らばかりのところに来たのは久しぶりです。如何に自分が楽な生き方をしていたことか。不安な部分もあるが、challengeしていこうという決意を新たにしました。そして少しでも日本のため、世界のためという高邁な目標に向かいたいと思います。

【井上 聡美】

春合宿を通してJASCerとしての自覚を持ち、今後本会議に向けてRTの内容の面でも、英語の能力の面でも課題をたくさん見つけることができた。62回の最高の仲間たちと最高の夏を過ごせるよう、努力していきたい。

【奥谷 聡子】

非常に意識が高く、ユニークなメンバーにとて

第2章 事前活動

も刺激を受けました！このメンバーと日米学生会議に参加して、自分自身成長したい。全力を尽くして最高の会議にしよう！

【米本 大河】

2010年春、ここオリンピックセンターで芽生えた友情の種は夏には大きな大きな花を咲かすだろう。きっとそれを62本のどの花よりも大きくして見せる。自分を見つめ仲間とともに成長し最高の舞台を分かち合いたい！

【橋本 遥】

36人で4ヶ月間、70人で1ヶ月間。この短い期間で何が出来るか。自分を曝け出し、相手を慮り、自分をよく知るために、恐れず果敢に挑戦しよう。そして互いに認め合い、刺激し合い、尊敬し合える関係を築きたい。

【郭 ヒギョン】

ただの3日間にこれくらいの知識や刺激を得られた分、夏の1ヶ月本会議が楽しみでたまらない。これから夏の本会議まで自分の力が最大限に発揮されるように充電して最高の夏をすごせるように頑張りたいと思う。

【山口 寛明】

多くの刺激を受けたことによって、皆を牽引していく働きをしていこうという強い気持ちが芽生えた。メンバーの心にどんどん火をつけていけるよう、頭でうんぬん考えるよりも行動で自己を示していく。

5. 英語ディベートワークショップ

日時：5月22日(土)

場所：ココデシカ青山

概要：本会議で必要となる英語での会話能力を超えた「議論力」を養うため、本プログラムのアラムナイである井上敏之氏(英語ディベートトレーナー)のお招きで、英語ディベートワークショップを行った。ここでは、ディベートの練習を通じて英語で討論するための「脳」作りや瞬発力を鍛えるレッスンの後、実際に3人一組でのディベートを行った。その議題には、「犬とアイボどちらがよいか？」といったものから「日本にとって中国

よりアメリカ合衆国のほうが重要であるか？」といったテーマも存在し、全員が白熱したディベートを行った。



6. 防衛大学校研修

日時：6月11日(金)

場所：防衛大学校(横須賀)

概要：日米学生会議では毎年、日米関係を考えるにあたって重要な「軍事」という観点をより詳しく学ぶため、同世代の学生の中でも防衛大学校の学生との対話の機会を設けるとともに、防衛大学校教授より特別講義を受けている。

本年度は、防衛大学校施設見学をはじめとし、山口教授、吉田一佐による特別講義のほか、防衛大学校学生と日米学生会議参加者による各分科会に分かれた討論が行われた。



参加者の感想(郭 ヒギョン)

防衛大学の研修は、私にとって3つの成果が得られた貴重な経験であった。まず、1つ目の成果は新しい日本人を見つけたということ。「日本のために」という意識が強い彼らと話しながら、戦

争の記憶から「愛国心」をタブー視してきた多くの日本人を「平和ボケ」していると一般化していた自分の偏見が考え直された。次に2つ目の成果は、「自衛隊」と「軍隊」の違いが分かった点である。個人的にその違いは法律上だけであって、やっていることはあまり変わらないという印象を受けた。実際に交流を通じて、彼らの意識からも自衛隊をほぼ軍隊として認識していることが分かったが、一般の軍隊より自衛隊員を目指している防衛大生の方が「国際貢献」という意識が高いと感じた。最後の3つ目の成果は、一般の大学生と全く違う生活を過ごしている彼らの日々を見て、いかにも自分が楽な生活をしてきたのか実感したことだ。彼らに比べると私の自己管理能力や社会への意識はきわめて低いものである。こうした成果を生かして、これから頑張っていきたい。

7. 沖縄研修(学生有志活動)

日時：6月25日～28日

場所：沖縄県(キャンプフォスター、在沖米国総領事館、名護市庁舎、辺野古等)

*本研修は第62回日米学生会議参加者のうち、本会議でのワシントンD.C.での安全保障フォーラムに先立ち沖縄問題を現地で学習したい志のある学生33名が自費出費にて研修を企画、運営した。

<沖縄研修の目的>

新日米安保条約締結より50周年の節目となった2010年、日米同盟を巡る両国の政治的状況は大きな変化のときを迎えている。歴史的な政権交代ののち、在沖縄米軍基地問題を国民規模の課題に位置づけながらも迷走し続けたまま終焉した鳩山政権。その後を引きついだ菅新政権においても、この問題に対する明確な方向性は未だ示されていない。

創設以来75年間、日米の架け橋たる人材を輩出してきたJASCにとっても、沖縄の基地問題は、今後の日米関係を考える上で非常に重要な問題であり、今こそ学生という自由な立場から、社会に対して何らかの意見を発信する必要性があると考

える。本会議での第2サイトとなるワシントンD.C.において開催した安全保障フォーラムを意見発信の場とし、沖縄問題への理解を深め日米両国の相互理解に寄与するための第一歩として、実行委員会主催の有志活動という位置づけで本研修を実施するに至った。

【6月25日(金)アメリカの視点から学ぶ】

－在沖米海兵隊基地訪問

－在沖米国総領事館訪問

1日目はアメリカの視点から沖縄を見ることで、アメリカ側の主張を理解することを目的に研修を行った。はじめに、米海兵隊の基地であり、事実上沖縄米軍の中樞が置かれているキャンプフォスターを訪問し、海兵隊のRobert D. Eldredge氏よりレクチャーを頂いた。Eldredge氏によると、米海兵隊は米軍における陸軍を初めとする他の組織と比べ、迅速かつ柔軟に展開して対応するという機能を果たしているため、常に訓練を行い、沖縄に待機することが不可欠である、ということだった。また、思いやり予算や騒音問題等の日本側の負担が目立っているが、アメリカ側もその分「命」という負担を負っており、両者がWin-Win関係を築いていくことが大切である、とのご講義を頂いた。レクチャー後は基地内を見学して回り、訓練施設のみならず海兵隊の普段の生活の様子も見学した。その後、在沖米国総領事館に訪れ、Raymond F. Greene 在沖米国総領事より50周年を迎えた日米安全保障条約の意義を学ぶことができた。Greene氏は、世界最大の5つの軍隊のうち4つが東アジアに存在するからこそ沖縄に基地があることがとても重要である、ということや、基地移設問題は白黒をはっきりつけられるものではないが、移設は14年も前から日本と議論してきたものであり、急に移設案を変更することは難しい、等も指摘された。

第2章 事前活動

【6月26日(土) 平和学習】

- 県庁基地対策課によるレクチャー
- ひめゆり資料館見学
- 平和祈念公園見学・ひめゆり学徒隊生存者の方より講話



2日目は、午前には沖縄県庁の方から在沖米軍基地についての概要、それに対する県庁としての対応についてレクチャーして頂いた。講義の中では1日目とは対照的に米軍基地の存在が地域に与える悪影響について、犯罪や事故のデータを詳細に述べられていたのが印象的だったが、普天間基地返還後の利用可能性については、行政としても具体的なビジョンを描くことが困難なようであった。午後にはこの日のメインテーマであった「平和学習」を行った。ひめゆり資料館や平和祈念公園を訪問し、第二次大戦下に行われた沖縄戦について様々な資料を見学するとともに、戦時下において実際にひめゆり学徒隊として活動された方に当時の様子について伺う機会を得た。美しく広がる大海原と沖縄戦で戦死された多くの人々を弔う石碑を目の前にして、平和を願ってやまない沖縄の現状に、思いを馳せた一時だった。

【6月27日(日) 現地・沖縄の視点】

- 沖縄国際大学での勉強会(佐藤学教授)
- 地元住民・学生との意見交換会
- 研修リフレクション

3日目は、沖縄国際大学での基地問題勉強会を実施した。勉強会では、沖縄国際大学の佐藤学教授協力のもと、『砂上の同盟』の著者であり沖縄タイムズ論説委員の屋良朝博氏、沖縄の自治に詳しい琉球大学の島袋純助教授からレクチャーを頂き、

質疑応答では学生会議参加者との活発な議論も展開された。また、沖国大や琉球大の学生とのディスカッションも行った。会議参加者、現地学生双方からの率直な意見交換がなされ地元の人々が抱く基地に対する思いを感じる機会となった。勉強会後には、沖国大内で交流会を実施し、沖縄の伝統文化である「琉球舞踊」を鑑賞や、ディスカッションを継続するなどして交流を深めた。

米軍基地がすぐ傍に点在する嘉手納での宿泊となったこの日の夜には、ホテルのロジで研修全体に関するリフレクションが行われた。参加者の基地問題に対する認識の変化などについて議論するとともに、本会議へ向けた学生会議参加者としての自覚の必要性も課題として共有された。

【6月28日(月) 辺野古という現場】

- 辺野古訪問
- 名護市役所訪問(稲峰進市長より講演)

最終日となった4日目には、沖縄平和ネットワークという団体の大島和典氏の案内で、沖縄県内にある様々な米軍基地施設をバスでまわった。地元住民が基地周辺で受ける様々な被害の実態を五感で考える機会となった。また、日米合意においては普天間基地の移設先とされた辺野古地区を訪問し、地元で基地反対運動を継続されている方からお話を伺った。その後、辺野古への移設反対を掲げて当選した名護市の稲嶺市長からもレクチャーを頂いた。基地反対を掲げ具体的な行動を起こしている人々のお話を伺う中で、基地問題に対する会議参加者と地元の人々の認識の乖離や、問題に対する私達の認識の甘さを改めて実感することとなった。

<参加者の感想> (丸山 綾子)

例えば私が継続して特定の人にレイプされていて、その被害を必死に警察に訴えている。だが警察は取り合わず、「先に男性がレイプするほかの相手を探せ」「あなたのお陰でほかの女性が助かるから我慢しろ」と言われるとしたら-あまりの理不尽さに言葉も出ないだろう。相手が悪いのは明白

なのに、なぜ被害者の私がそんな苦勞を強いられるのかと。研修で出会った沖縄の方々が、「感情論」「国家的な安全保障戦略を考えていない」といった意見に対し示された怒りや悲しみの感情をどう理解すればいいのか考え続けて、この想定に行き着いた。もし沖縄の人々にとっての米軍や日本政府が、私にとっての男性や警察と同じような存在だとすれば、彼らがなぜあんなに怒られたかは、痛いほど分かる。この想定避けられない恣意性と不確かさを承知の上でも、なんとか自分の身に落として彼らの気持ちを理解しようとしたのは、基地問題の勉強を始めてからずっと感じていた、コミュニケーションの断絶という問題に向き合いたかったからだ。ある教授が「中国の脅威は計り知れない」と熱弁されるかと思えば、続いてお会いした活動家は全く相反する論拠に基づいて、「日本は平和で安全だ」と力説される。こうした矛盾する事態をどう受け止めればいいのか、戸惑っていた。多くの方が人生をかけて懸命に問題解決に向けて活動されているのに、根本の前提さえ共有されないで個々の議論のみが進んでいく事態が、ただ疑問だったのだ。

どう反対意見と折り合うか、いかに建設的に物事を進めるかが、もっと重視されるべきではないのか。そうしたもどかしさから、どの方に話を伺う時も、「この人は反対意見をどのように聞き、対応するのだろうか」と考えずにいられなかった。当初は私も国家安全保障の重要性をいかに沖縄の人々に理解してもらおうの関心があった。しかし前述の想像を経ると、そうした働きかけがいかに彼らにとって暴力的かを思い、何も言えなくなる。いくら論理的に正しく見えても、第三の道を模索しなければならないのだと思う。研修中、米軍関係者の方にこうした問題意識をぶつけた。「相互理解は、一歩進んだら3歩下がるようなものだ。だからこそ理解しあう努力を続けなければならない」との言葉が印象的だった。相手の立場を本当に理解すること、相手に響くよう自分の意見を示すことがいかに長い道のりか。それを知ったことが、沖縄研修の確かな収穫だった。

〈沖縄研修総括〉(大宮 透)

第62回実行委員の自主的活動として企画された沖縄研修だったが、その発端は「何か新しいことをやりたい」という実行委員としての純粋な思いと、沖縄における基地問題の複雑化に対して「日米」関係の一端を担う存在として何らかのアクションを起こしたいという使命感の両方が混在したものだ。結論から言えば、企画当初に私たちが漠然とイメージしていた最終目標、つまり「会議参加者が沖縄研修を経たことで基地問題に対する統一した見解や声明を出すこと」は、最後まで達成できなかった。むしろ、実際には事前の勉強会や本研修を通して参加者の基地問題に対する見解はより多様化したように思える。研修報告が中心となったワシントンでの安全保障フォーラムにおいても、「日米」という対立軸には収まらない多様な主張が展開される結果となった。「様々な視点から基地問題を考える」という研修の目的を考えれば、これは当然の帰結だったのかもしれない。

私自身が研修を通して何よりも強く意識したことは、基地問題を当事者として考えることの困難性であった。いや、一瞬の当事者意識であれば幾らでも持つことはできる。しかし、その問題を「自分のこと」として捉えた上で継続的に考えることは、私が現地に住むことがない限り不可能だと思う。

では、果たして私たちが「当事者意識」を持つことは必要なのだろうか。むしろ重要なのは、厳しい状況に生きる当事者の存在や彼らに対して私たち自身が知らぬ間に行っている「差別」や「無視」を自覚することなのではないだろうか。私たちは基地問題の当事者にはなれないかもしれない。それでも、彼らの叫びに耳を傾けること、具体的な解決策を私たちの方から進んで提案することは可能はずだ。

最後に、研修を企画していく中で、本当に多くの方々から暖かいご支援・アドバイスを頂きました皆様、特に1日目の米軍基地や総領事への訪問実現に尽力していただいたJASC アラムナイの山

第2章 事前活動

本東生氏、また、3日目の沖国大における勉強会・交流会を一手に引き受けてくださった佐藤学教授には、数ヶ月間にわたる準備にご協力頂きました。また4日目に1日ばかりで私たちに基地問題の本質を語っていただいた沖縄平和ネットワークの大島和典氏、ご多忙にも関わらずレクチャーにお時間を割いていただいた稲嶺進名護市長、その他、研修を支援してくださった皆様に、この場を借りて心より御礼を申し上げます。本当に有難う御座いました。

8. 第62回日米学生会議 直前合宿

日時：7月24日・25日

場所：代々木オリンピックセンター

概要：第62回日米学生会議本会議に先立ち、各分科会が日本での事前活動のまとめや、本年度の4つの開催地についての情報の共有、バディー(本会議中で互いに手助けをするため、日本側参加者とアメリカ側参加者一人ずつがペアになり、事前に連絡を取り合う制度)となったアメリカ側参加者について他の日本側参加者に情報共有をするなど、最終準備を行った。